

史 跡 斎 宮 跡

昭和59年度現状変更緊急発掘調査報告

昭和60年3月

明 和 町
三重県斎宮跡調査事務所

序

斎宮跡が国史跡に指定されてから、はや6年目を迎えました。この間、斎宮跡を究明するための計画調査は調査面積約96,000m²および、史跡の公有化も国・県の援助を得て14haにも達しました。また斎王の森を中心に一部史跡公園の整備がなされ、さらに昭和58年度には、かねてからの懸案でありました保存管理計画の見直しについて地元の合意を得るなど斎宮跡の保護保存は、徐々に進展してまいりました。

一方、史跡内に住宅密集地をもつ遺跡の性格から、個人住宅の増改築等の現状変更許可申請が毎年多く提出され、そのため町といたしましては、昭和51年度より毎年、国並びに県の助成を得て事前調査をおこない、調査後、地主のご理解・ご協力を得て建物の基礎が造構に影響を及ぼさないよう盛土等で保存をおこなってきております。

これら現状変更に伴う事前調査は小規模なものがほとんどでありますが、その場所は140haの史跡内に点在しており、計画調査では得られない貴重な資料を与えてくれるものであります。この資料の蓄積により斎宮跡の姿がより明確になることを期待するものであります。

最後に、発掘調査にご理解・ご協力いただいた地主の方々や、発掘調査及び報告書の作成を担当していただいた三重県斎宮跡調査事務所並びに関係各位に対して深甚の謝意を表する次第であります。

昭和60年3月

明和町長　辻　英輔

例　　言

1. 本書は明和町が昭和59年度国庫、及び県費の補助金の交付をうけて実施した史跡斎宮跡の現状変更緊急調査の結果をまとめたものである。
2. 調査は明和町が調査主体となり、三重県斎宮跡調査事務所が担当した。
3. 本書の中で第53－1・14次の発掘調査は明和町教育委員会の調査であり、第53－6次とともに、調査費用は明和町が単独で負担した。
4. 明和町教育委員会による第53－1・14次の現地調査は町教育委員会中野敦夫技師が担当し、調査結果は既刊の『史跡斎宮跡 斎宮小学校内発掘調査報告』としてまとめられている。
5. 発掘調査・整理および本書の作成には斎宮跡調査事務所の山沢義貴、谷本鏡次、福村直人、倉田直純があたり、刀根やよい、豊田敏子、坂真弓美、皇学館大学生若林真登、松田早苗の協力があった。
6. 遺構実測図、遺構表示等は全て三重県斎宮跡調査事務所刊行の調査概報に準じている。

目 次

1. 前 言.....	1
2. 第53-1次調査.....	2
3. 第53-2次調査.....	5
4. 第53-3次調査.....	8
5. 第53-4次調査.....	9
6. 第53-5次調査.....	11
7. 第53-6次調査.....	11
8. 第53-7次調査.....	12
9. 第53-8次調査.....	13
10. 第53-9次調査.....	14
11. 第53-10次調査.....	16
12. 第53-11次調査.....	17
13. 第53-12次調査.....	20
14. 第53-13次調査.....	21
15. 第53-14次調査.....	23
16. 第53-15次調査.....	24



1. 前　　言

昭和58年12月、かねてから懸案であった史跡斎宮跡保存管理計画の見直しが、文化庁の指導や県の協力を得て、ようやく地元地権者と管理団体である明和町との間で一応の合意をみた。しかし平安時代の斎宮寮の推定地でもある中町集落北部のC地区については合意が得られず、第2種保存地区として、昭和64年3月31日を期限としてその保存の方向付けを明示することになった。そのため本年度は中町地区における計画調査、現状変更に伴う事前調査の推進、および積極的な対応が迫られることになった。

本年度の現状変更に伴う許可申請件数は30件あった。このうち調査は、昭和57・58年度に申請のあったものも含め12件、調査面積1,589m²にわたり実施した。このほかに明和町単独事業の調査として、町立斎宮小学校増改築工事に伴う事前調査や町道側溝に伴う調査も3件、約1,300m²にわたり実施している。

調査箇所は、宮城北西部の坂本集落南部地区、宮城東部の中町地区のほか、近鉄線以南で旧参宮街道に面する集落の南側や北側の畠地での調査が多い。坂本集落南部で実施した第53-2次調査では、奈良時代後期の南面廂付東西棟建物2棟のほか、これと柱通りの方向を揃える南北棟建物の一部を検出しており、当調査区北東50mの箇所で昭和57年度に実施した第43-1次調査出土の「美濃」刻印須恵器とともに、奈良時代斎宮の所在を考えるうえで貴重な発見となった。また宮城北東部で実施した第53-8次調査は、わずか58m²と小規模な調査ではあったが、宮城の北をめぐる大溝の南肩部分と思われる遺構を確認した。一方、牛葉集落南部で実施した第53-9次調査や指定地の南端部にあたる第53-11次調査では、円形周溝、竪穴住居、掘立柱建物など奈良時代の遺構・遺物を比較的多く検出し、今後奈良時代の斎宮とのかかわりが問題となろう。宮城の南を限る遺構については、今回も明確にし得なかつたが、集落南部の畠地は、南端部までは全面にわたり遺構が分布しているようである。中町集落北部の第2種保存地区で実施した第53-15次調査は、整然と配置された平安時代前期の大型掘立柱建物や多量の綠釉陶器、墨書き土器が確認された第34次調査の西側にあたり、本年度は申請地の東半分しか調査できなかつたが、予想通り斎宮寮の主要な殿舎の1つや、これに付属する何棟かの建物が検出され、今後の保護措置が重要となろう。

以上のように、現状変更調査は小規模な調査ではあったが、計画調査だけでは補いきれない多くの貴重な資料を得ることができた。1件あたりの調査面積も地元の理解で増える傾向にあり、今後とも可能な限り広く調査できるよう努力し、資料の蓄積を計りたい。

2. 第53-1次調査(6 ACM-P)

調査場所 明和町竹川字東裏284

原 因 小学校体育館新設

調査主体 明和町教育委員会

調査指導 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和59年3月27日～5月9日

調査面積 1,250m²

1)はじめに

斎宮小学校校舎の西南側に体育館を新設することになり、その事前の発掘調査である。学校用地の調査は、昭和52年の第15次（学校建築）調査にはじまる。その際、築地塀、四脚門、竪穴住居、円形周溝など多数の遺構が検出されており、四脚門の一部については校舎床下に現状保存されている。

その後、昭和58年6月に第48-1次（プール新設）調査、昭和59年2月に第48-13次（校舎増築）調査と学校施設建設に伴う調査が実施されている。また、昭和58年9月には第48-8次（個人住宅新築）調査が実施されている。第48-8次調査では、奈良時代中期のややまとまつた土器が出土しているものの、大半は鎌倉時代以降のものであり、集落の周辺、参宮街道へ近づくにつれ、中・近世のものが多くなる傾向が認められた。

調査区は東西30m×南北40mで、地形上は僅かに西へ傾斜しており、地山面の標高は12.6m～13m前後である。

2) 調査概要

遺物包含層は暗褐色土で、20cm足らずの厚さである。奈良時代の竪穴住居や土塙が調査区南側部分にまで検出された。

奈良時代の遺構は竪穴住居7、土塙5、溝1がある。

S B3771・S B3774は前期の遺構で、S B3771は一辺3.7m、深さ21cmで、東壁にカマドが設けられている。S B3774は、一辺4.8m、深さ16cmの方形を呈する。

S B3770・S B3772・S B3773・S B3775・S B3776は中期のものである。規模は最大のS B3775は5.6m×3.5mで、最小のS B3772は3.8m×3.0mである。S B3770・S B3773は北壁に、S B3772は東壁にカマドを設け、またS B3775も東壁に焼土の散布が認められた。

調査区北側のS B3770・S B3772・S B3773は等間隔に建ち並び、正方形もしくは東西に長

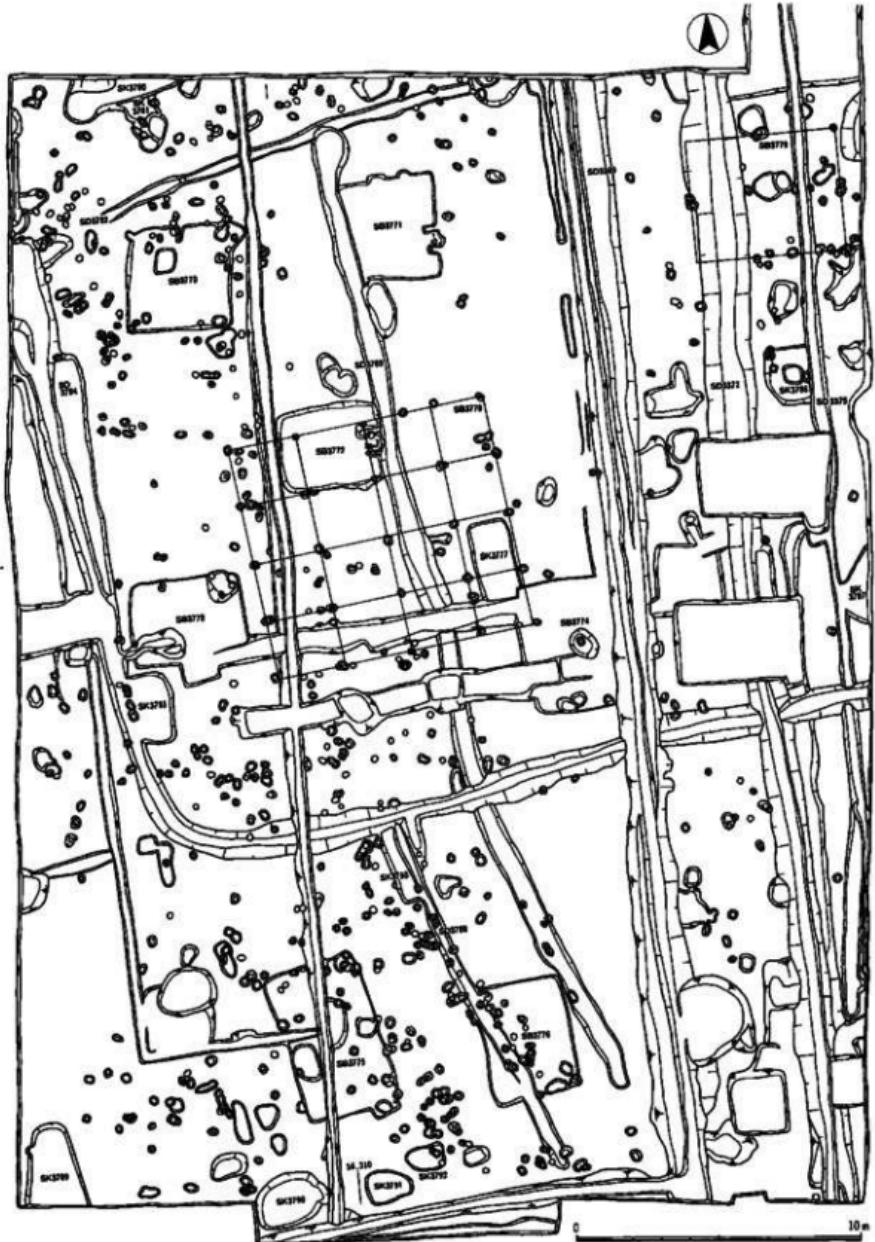


fig. 2 造構実測図 (1 : 200)

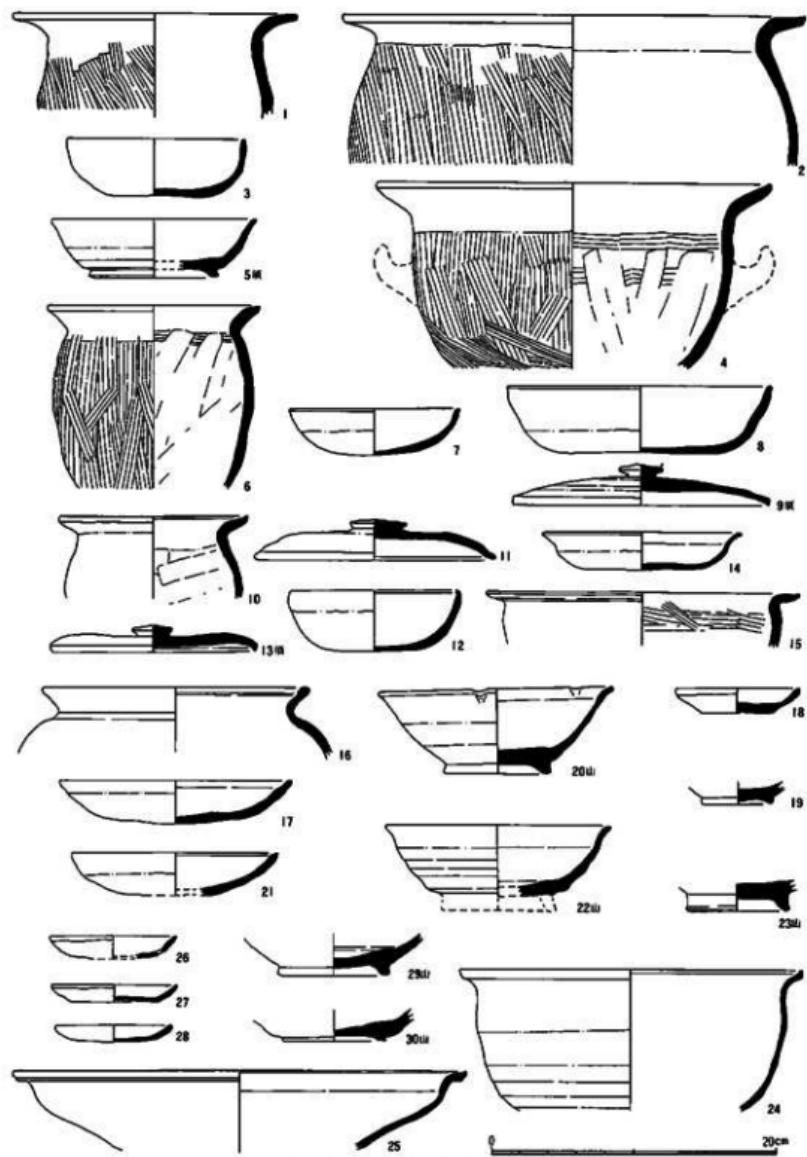


fig. 3 遺物実測図 (1 : 4)

S B3771; 1~5、S B3770; 6~7、S B3776; 8~9、S B3775; 10~13、
S K3781; 14~15、S D3784; 16~20、S K3780; 21~23、S D3372; 24~30

い同規模の建物であるが、南側のS B3775・S B3776は南北に長く西に偏くものであり、二群に分けることができる。

平安時代の遺構は、前期・後期・末期のものがある。

前期の土塙 S K3781はS K3780に削平された不定形な土塙で、黒雀90号窯期の新しい時期に相当する遺物が出土している。

後期の遺構としては溝 S D3782・S D3783がある。

末期の遺構は、掘立柱建物 S B3778・S B3779、土塙 S K3777・S K3780・S K3785、溝 S D3784がある。S B3778は4間×4間の總柱の建物で、南東隅にS K3777を伴う。柱掘形は径30cmで挙大の石をとするものも認められた。S D3784は幅1m～1.2mで北から東にL字状に曲がり、逆台形状を呈している。この溝から南北・東西にそれぞれ5m内側に掘立柱建物 S B3778があり、溝と建物の方向も一致することから、この建物を区画する溝と考えられる。

その他、溝 S D3369・S D3372・S D3375は室町時代の遺構で第48-13次調査で検出した溝につながる。

今回の調査で検出された遺構の主体は、奈良時代の竪穴住居であり、同時代の掘立柱建物は確認されていない。このことは、出土遺物の中に硯などがみられないこととあわせて官衙地区とは考え難く、古里を中心とする官衙の周辺部と思われる。一方平安時代にあっては前期～中期の遺構はほとんどなく、後期～末期の遺構・遺物も少ない。特に宮城中・東部では末期の掘立柱建物は、同一場所で何度も建て替えられた状況を示しており、当地区とは様相を異にしている。これは平安時代初期に官衙が宮城中・東部に移動したことに起因するものと思われる。

3. 第53-2次調査(6ACA-M)

調査場所 明和町斎宮字古里3280-2

原 因 個人住宅新築

調査主体 明和町斎宮跡保存対策室

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和59年5月17日～5月29日

調査面積 112m²

1)はじめに

調査地は宮城北部の坂本集落に近い畠地に位置する。この付近はこれまで、第13-3次調査、第41次調査、第43-1次調査など、計3回の調査を実施している。第41次調査では鎌倉時代の

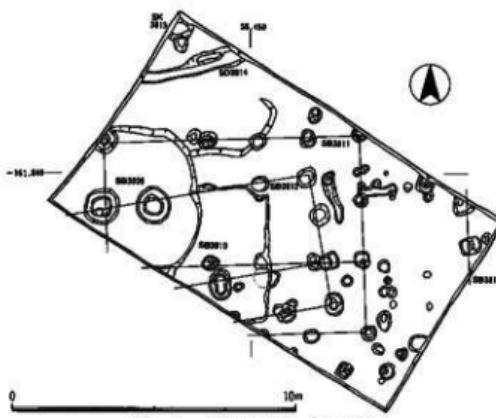


fig. 4 造構実測図 (1 : 200)

SB3810はSB3809より古い。南北4.8mで、壁は直線的で深さ20cm~30cmである。東壁の南寄りにカマドがあつたらしく、70cm×60cmにわたって焼けている。これら2つの竪穴住居の方向は、いずれもほぼ方位にのる。

SB3811は5間×3間の掘立柱建物である。桁行9m、梁行6.9mで南に廟をもつ。柱間は桁行1.8m、梁行2.25mで廟は2.4mを測る。柱穴はいずれも径50cm足らずの方形を呈しており、深さ50cm~80cm。建物の方向はほぼ方位にのりE2°Nである。SB3812は、SB3811同様、

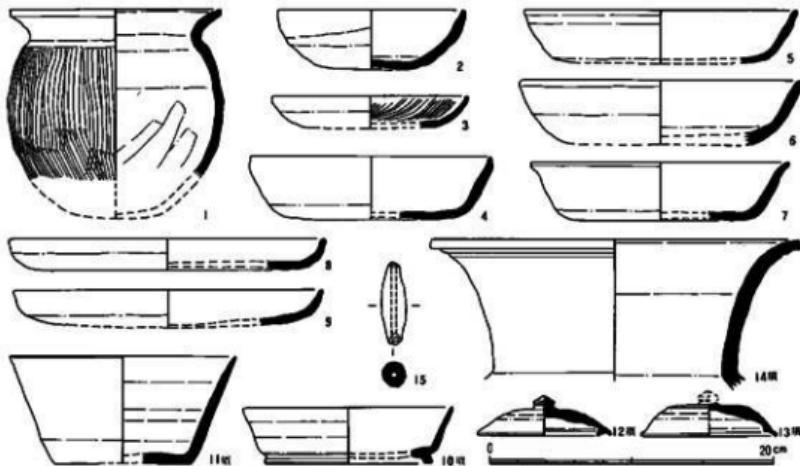


fig. 5 造物実測図 (1 : 4) 包含層; 1~15

大溝SD5を検出しておおり、第43-1次調査では、奈良時代貢宮の存在を考えさせる「美濃」刻印須恵器を出土している。

2) 調査概要

検出した遺構は、竪穴住居2、掘立柱建物3の他に、溝、土塁などがある。

竪穴住居SB3809は、南北5mの隅丸方形を呈し、地面上面からの深さは50cmである。主柱穴は検出できなかった。SB

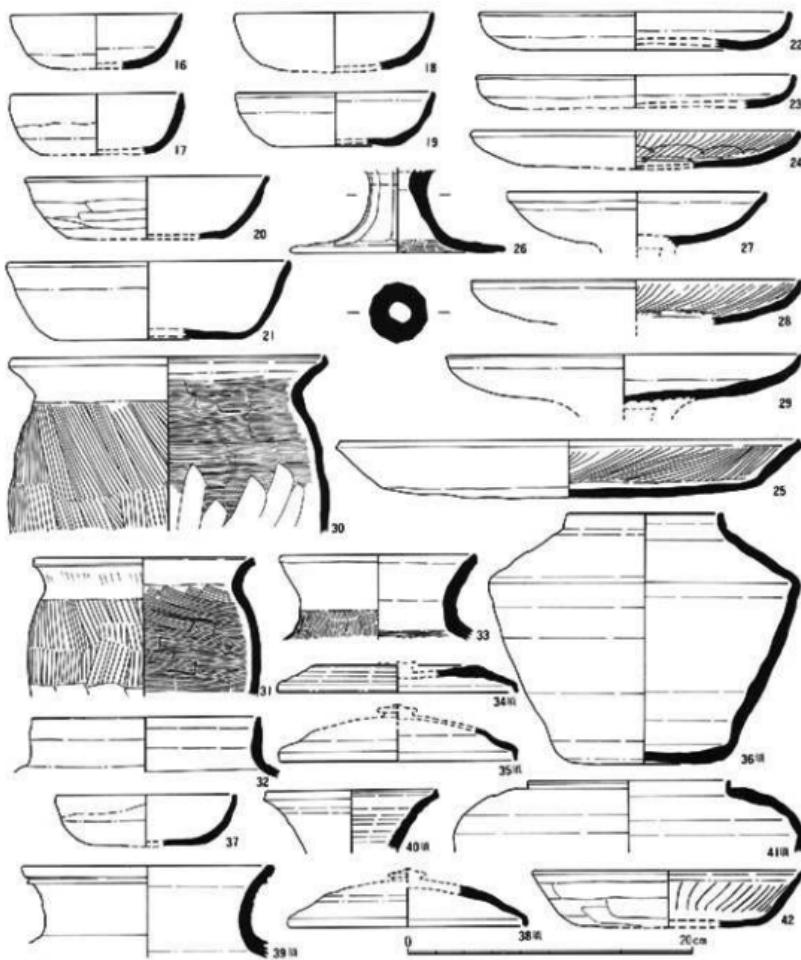


fig. 6 遺物実測図 (1 : 4) SB3809; 16~36, SB3811; 37~41, SK3815; 42

東西棟の掘立柱建物で南に廟をもつ。SB3811より一回り小さく、(5)間×3間で、梁行4.65mで、柱間はそれぞれ1.85m、1.55m、廟は1.5mである。柱穴は径80cm近くの楕円形を呈する。建物の方向はE10°Nである。

また、発掘区の東隅部分で柱穴2個を検出したが、南北棟の掘立柱建物の一部と考えられる。このSB3813はSB3811と建物の方向、桁行柱間を同じくする。その他にSB3811の東側柱に

並行する柱穴群や北隅で幅40cm、深さ10cm足らずの溝S D 3814などを検出している。

遺構は奈良時代に限られるが、竪穴住居は前期に、掘立柱建物は後期に属する。これは宮城西部に奈良時代の竪穴住居と掘立柱建物が混在する様相と似る。

4. 第53-3次調査(6ABE)

調査場所 明和町竹川字古里573-2

原 因 個人住宅新築

調査主体 明和町齋宮跡保存対策室

調査担当 三重県齋宮跡調査事務所

調査期間 昭和59年8月13日～8月23日

調査面積 180m²

1)はじめに

坂本集落南部の県道南藤原竹川線に面した西側の畠地である。これまでにおこなった第5次(古里D地区)調査、第39次調査の面調査や、第21-6次調査、第25-2次調査、第31-6次

調査のトレンチ調査の結果、古里地区北部の様子は、飛鳥～奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物が多く検出されているほか、鎌倉時代の遺構・遺物も多く、遺構の大半はこの時期に限られている。また場所によって遺構密度の高い所と低い所があるようである。

東西16m×南北11mの調査区を設定した。

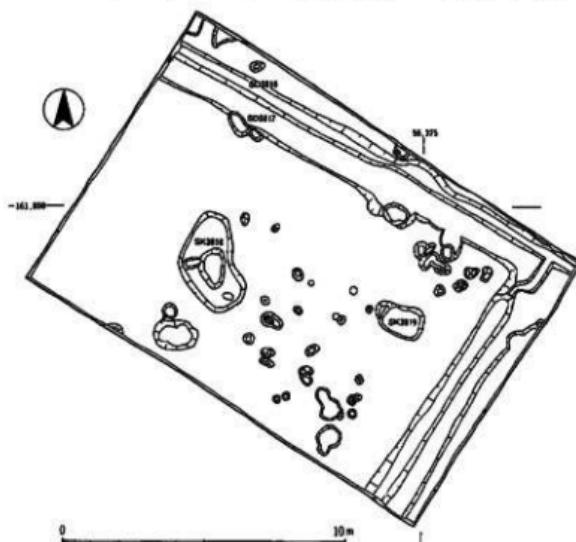


fig. 7 遺構実測図 (1:200)

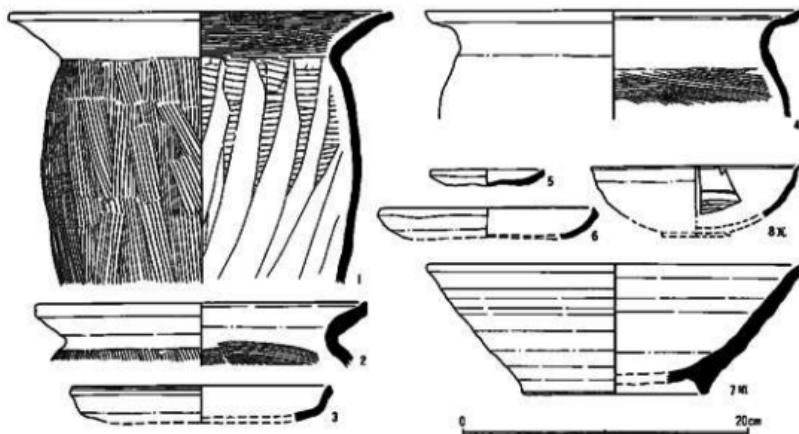


fig. 8 遺物実測図 (1 : 4) S K3818; 1~3, S D3816; 4~6、包含層; 7・8

2) 調査概要

地山まで約40cm~60cmと深い。

今回の調査区は比較的の遺構・遺物が少なく、奈良時代後期の不整形土塙 S K3818とS K3819、鎌倉時代前期~中期の東西溝 S D3816とS D3817を検出したのみである。

S K3818は3.5m×1.9m、深さ20cm、S K3819は1.8m×1.1m、深さ30cmである。S K3819からは、土師器杯・甕・瓶などが出土している。

S D3816は幅60cm、深さ20cm、S D3817は幅約1m、深さ10cmで、埋土の切り合いでより S D3816の方が新しい。いずれも山茶碗、土師器甕・皿・小皿・三足鍋脚部、片口鉢などが少量出土している。

調査区東半部の小穴については、掘立柱建物の柱掘形とは考えられず、また県道の西側に沿って南北に走る2条の溝は出土遺物がないため不明であるが、近代のものと思われる。

当調査地では奈良時代の竪穴住居、掘立柱建物が混在する地区と予想されたが、土塙と溝の検出にとどまり、比較的遺構密度の低い場所であることが確認された。

5. 第53-4次調査(6ACL-S)

調査場所 明和町竹川字東裏271-1

原 因 収納小屋新築

調査主体 明和町斎宮跡保存対策室

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和59年8月22日～8月30日

調査面積 70m²

1) はじめに

斎宮小学校の南西部にあたる箇所である。付近は、斎宮小学校関連の調査をはじめ大型の現状変更に伴う事前調査が集中して行われており、奈良時代及び平安時代末期～鎌倉時代前期の遺構を多く検出している。

東西10m×南北7mの調査区を設定した。

2) 調査概要

調査地は旧竹やぶ地であったため、腐食土が40cmほど堆積しており、遺構の検出される地山まではさらに黒色土が40cmほどあった。

検出したおもな遺構は、奈良時代の土塙SK3822、平安時代末期の溝SD3823のみで、小穴については建物としてまとまらなかった。SK3822は、調査区北西隅でみつかった溝状を呈するものである。遺物としては、土師器杯・甕などが少量出土している。SD3823は幅30cm～50cm、深さ10cm～20cmの小溝で、土師器杯・灰釉陶器が少量出土している。

また、特殊な遺物としては、遺物包含層より土馬の頭部片が1点出土している。このほか調査区の南東部で戦時中の防空壕跡も確認した。

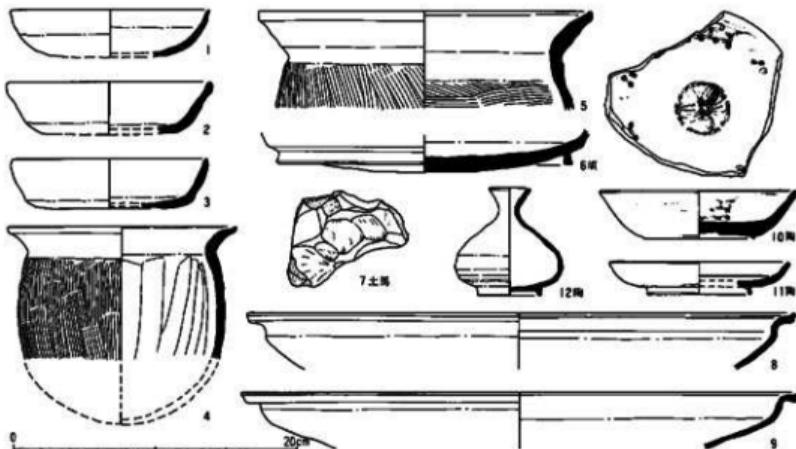


fig. 9 遺構実測図 (1:200)

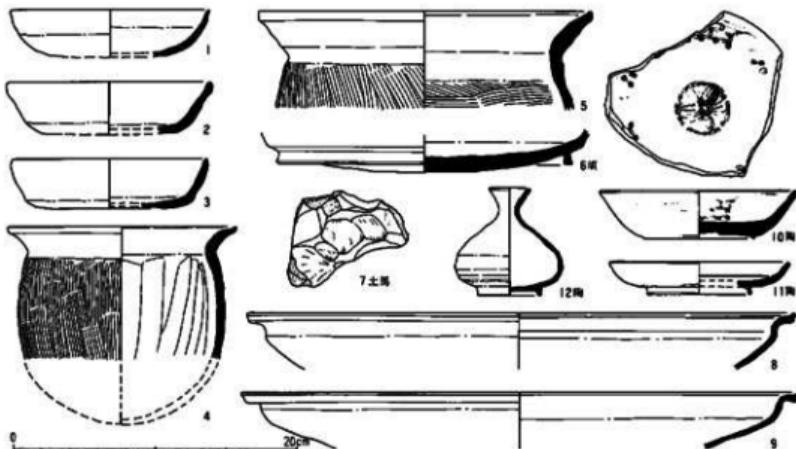


fig. 10 遺物実測図 (1:4) SK3822; 1、包含層; 2～12

6. 第53-5次調査(6 ACR)

調査場所 明和町斎宮字木葉山97-5
原 因 倉庫新築
調査主体 明和町斎宮跡保存対策室
調査担当 三重県斎宮跡調査事務所
調査期間 昭和59年8月24日～8月29日
調査面積 27m²

1)はじめに

宮城南端部、牛葉墓地の北側である。昭和50年の第9-2次(Rトレンチ)調査、第9-3次(Sトレンチ)調査、昭和54年の第26-4次調査と付近でトレンチ調査がくり返されているが、造構・遺物とも少ない。

東西5.5m×南北5mの範囲で調査を実施した。

2)調査概要

造構の検出される地山面までは50cmと深く、遺物を含まない黒色土が厚く堆積している。地山の色は灰白色粘質土で、当地区がやや低めであったことが窺われる。

北西隅の小穴は、径20cm、深さ24cmで、掘立柱建物の柱掘形と考えられるが、他の柱穴が調査区外にあると考えられるので、全容は不明である。遺物は平安時代末期の土師器甕がある。

小範囲の調査であったためもあるが、造構・遺物とも非常に少なく、宮城南西部分の様相について知る手がかりとはならなかった。

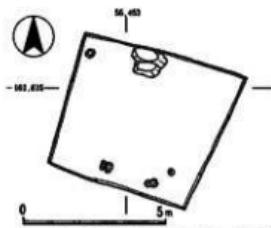


fig. 11 造構実測図(1:200)

7. 第53-6次調査(6AGO)

調査場所 明和町斎宮字鍛冶山地内
原 因 町道側溝新設
調査主体 明和町斎宮跡保存対策室
調査担当 三重県斎宮跡調査事務所
調査期間 昭和59年9月3日～9月4日

側溝は町道の西側肩を掘削して取付けられるものであるが、既に旧地表より1m程の盛土か

されて町道がつくられているので、側溝部分にあたる幅1.2m、長さ117m、深さ60cmをあらかじめユンボで排土した後、部分的に遺構面を確認することにした。

その結果、掘削面から旧地表まで40cmあり、さらに遺構面までは数10cmあるため、幅1m程のトレンチ調査では危険が伴うため調査不可能と判断した。また遺構への影響は、軽微であると考えられるので、調査を打ち切り、工事立会いにとどめた。

8. 第53-7次調査(6 ADD-U)

調査場所 明和町斎宮字篠林3147-3

原 因 資材置場造成

調査主体 明和町斎宮跡保存対策室

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和59年9月6日～9月19日

調査面積 64m²

1) はじめに

斎宮字出在家に隣接する篠林の畠地で、当調査区のすぐ北側は、宮城北部を迂回する鎌倉時代の大溝の予想される場所である。幅4mと幅1mのトレンチをコの字形に設定し、既に厚さ30cm程の盛土がされていたため、重機でこれを排土したのち、調査を実施した。

2) 調査概要

遺構の検出される地山面までの基本的な層序は、盛土(30cm)、旧耕土(20cm)、黒色土(20cm)となっており、地山まで比較的深い場所である。

調査区南西部は近世の擾乱をうけているが、溝S D3826・S D3827・S D3828を検出した。S D3826は幅60cm、深さ20cmで、奈良時代の土師器甕・高杯などを出土している。S D3827は幅80cm、深さ20cmである。西端でS D3826に合流するものと思

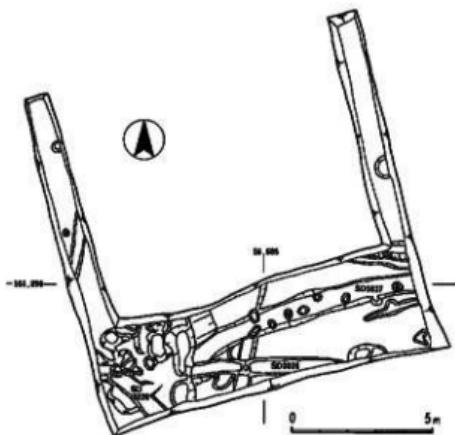


fig. 12 遺構実測図 (1:200)

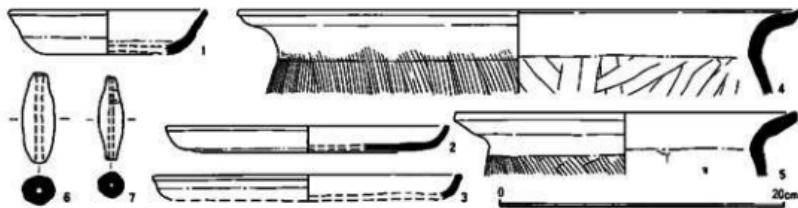


fig. 13 遺物実測図 (1 : 4) SD 3827; 1、SD 3828; 2~5、包含層; 6~7

われる。SD 3828は幅50cm、深さ35cmで、ほぼ東西軸線にのる溝である。土師器長甕・皿・鍋、須恵器平瓶等の細片が出土している。

検出された溝3条はいずれも奈良時代の溝である。建物造構は検出されなかったものの、これまでの近辺の調査から、篠林地区における造構の中心は奈良時代と平安時代後期に限られるようであり、こうした傾向は宮城周辺部の地区と類似している。

9. 第53-8次調査 (6AGE-O)

調査場所 明和町斎宮字東前沖2470-2

原 因 個人住宅新築

調査主体 明和町斎宮跡保存対策室

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和59年9月21日～9月29日

調査面積 58m²

1) はじめに

調査箇所は、宮城の北東隅部分で、字東前沖のほぼ中央である。これまで畠であったところで、すぐ東40mの箇所で第9-5次調査を行っており、その際、幅2.3m、深さ1.7mの溝を検出しており、今回の調査においてもこの大溝の存在が予想された。

東西10m×南北6mの方形の調査区を設定して実施した。

2) 調査概要

調査区は標高8.9mの畠で、北側の道路部

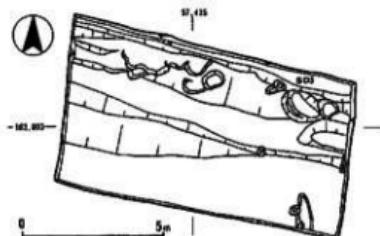


fig. 14 造構実測図 (1 : 200)

分はやや低くなっている。地山も南側では地表より15cmと浅いが、北に向って徐々に低くなり、耕作土下に暗褐色土が堆積しており、地表より約60cmと深くなっている。

検出した遺構としては東西に走る溝と数個のピットを確認したのみである。道路際で確認した溝は、第9-5次調査および第37-4次調査で検出した、斎宮跡の北をめぐる大溝SD5の南肩部分と考えられる。溝幅・深さについては不明である。溝からは平安時代末期から鎌倉時代にかけての土師器杯・甕・鍋、山茶碗などが出土している。数個のピットは不規則でまとまらない。

僅か60m足らずの小規模な調査であったが、北を限る大溝を確認した。この大溝より南側は第9-5次調査同様、遺構の無い箇所があり、遺構は調査区のさらに南側に分布しているものと思われる。

10. 第53-9次調査(6ACS-O)

調査場所 明和町斎宮字木葉山95-2

原 因 倉庫新築

調査主体 明和町斎宮跡保存対策室

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和59年11月22日～11月30日

調査面積 305m²

1)はじめに

牛葉墓地の北東側で、第53-5次調査地の道路を隔てた所である。東西に長い敷地で、耕土場所がなかったため、調査を2回に分けて実施することとした。

2)調査概要

調査の結果、多数のピット、溝が検出された。これらは奈良時代と鎌倉時代のものに大別される。しかし、ピットは建物としてはまとまらないようである。

調査区の中央および東部分でみつかっているSD3833、SX3830は奈良時代の溝である。SD3833は幅1m、深さ10cm～32cm、円形周溝SX3830は、SD3833に接するように巡り、南西部が調査区外にのびるが、周溝の内々の径は7mで、部分的につながらない陸橋部分がある。幅は50cm。底部には各所に10cm～20cmの凹部がある。土器の出土はほとんどなく、わずかに土師器杯が1点出土したのみである。

SD3831とSD3832は鎌倉時代の溝で、SD3831は幅80cm、深さは20cm～35cmで、ほぼ南北

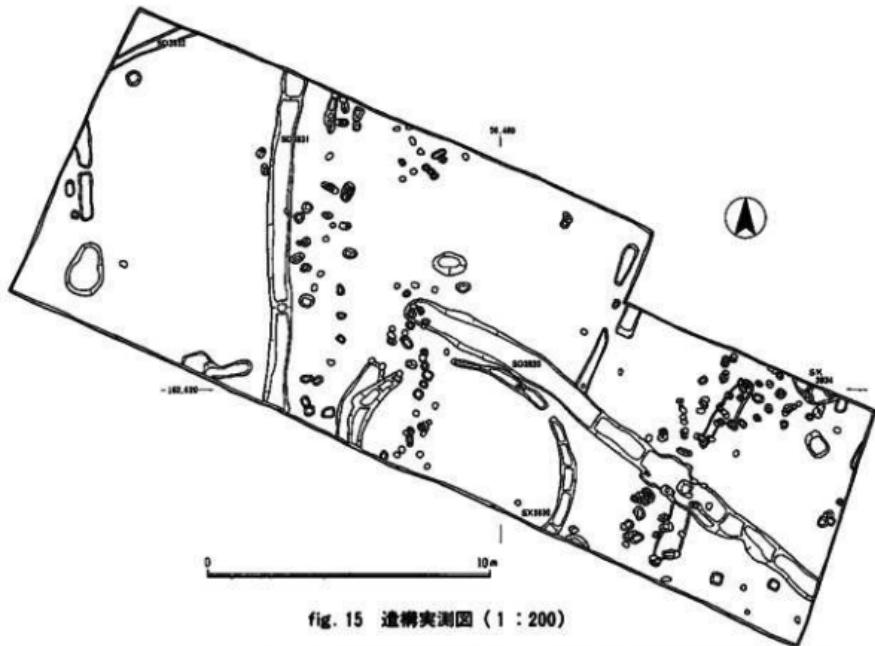


fig. 15 造構実測図 (1 : 200)

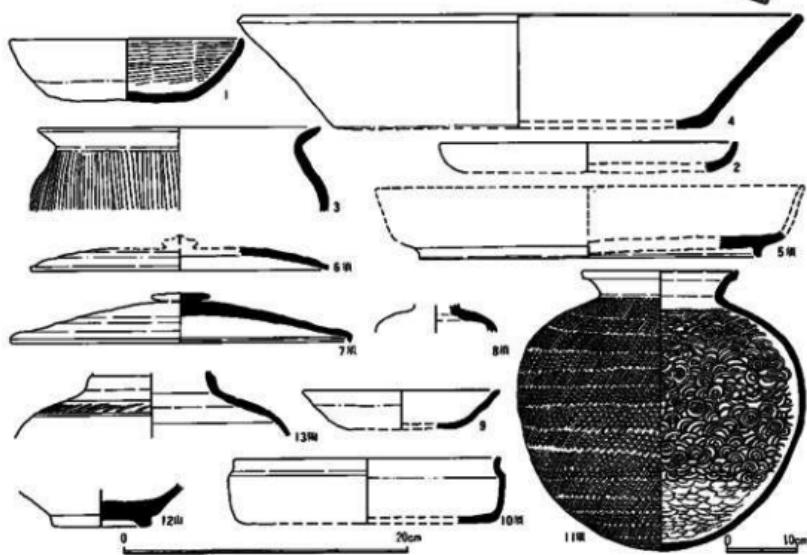


fig. 16 造物実測図 (1 : 4)

S X 3830; 1、S D 3833; 2~8、S K 3834; 9、
包含層; 10・11、S D 3831; 12・13、(11のみ 1 : 8)

に走る。土師器鍋・皿、山茶碗とともに白磁碗、古瀬戸壺などが出土している。S D3832は調査区の北隅部分でみつかっているが、調査区外へ延びるため全容は不明である。幅40cm、深さ13cmとS D3833より一回り小さい。遺物は土師器杯・甕、陶器など数片出土している。

今回検出したS X3830で、第15次調査のS X705、S X715、第25-9次調査のS D1590、S D1591と、円形周溝は合計5基の発見となった。いずれも斎宮小学校の周辺である。周溝の性格は未だ明確にし得ないが、奈良時代の斎宮内の特異な地域であったようである。

11. 第53-10次調査(6ACA-R)

調査場所 明和町斎宮字古里3267-1

原 因 倉庫新築

調査主体 明和町斎宮跡保存対策室

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和59年11月22日~11月28日

調査面積 33m²

1) はじめに

坂本集落南部の県道南藤原竹川線に面した東側の畠地である。これまでに県道沿いの現状変更は5件ほど行っているが、第31-6次調査を除き、いずれも掘立柱建物はみつかっておらず奈良時代の土塙や溝のほか鎌倉時代の溝などがわずかに検出されているのみで、比較的遺構密度の低い場所である。

東西6m×南北5.5mの調査区を設定し、調査を実施した。

2) 調査概要

奈良時代末期の土塙S K3835、完形の土師器長甕が出土したPit 3837のほか鎌倉時代以降と思われる浅い溝S D3836を検出した。

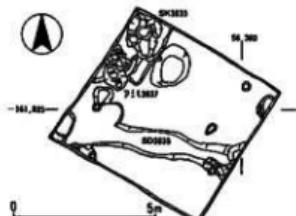


fig. 17 遺構実測図 (1:200)

S K3835は、1.6m×1.2mの横円形を呈するが、土塙の底は、浅いところや深いところがあり、複雑な様相をみせている。遺物は土師器甕・杯・皿のほか、平城宮で壺Gと分類している須恵器壺など平箱で約1箱分の出土があった。一方S D3836は、深さ10cm程の浅い溝で調査区南西隅からS K3835を切ってさらに調査区西辺に沿って北へも延びている。

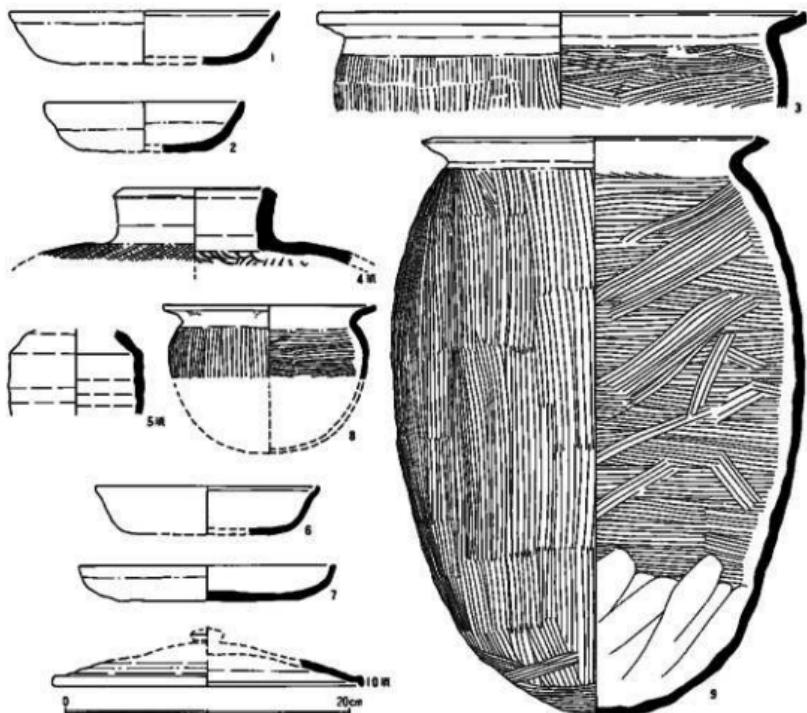


fig. 18 遺物実測図 (1 : 4) SK3835; 1~5、Pit 3837; 6~9、包含層; 10

以上のように、小範囲の調査であったため、掘立柱建物を確認するまでは至らなかったが、場所によって造構密度の高さこそ違え、奈良時代と鎌倉時代の造構が主体を占めるという古里地区北部の状況が、調査次数を重ねるごとに明らかになりつつある。

12. 第53-11次調査(6ADR-W)

調査場所	明和町斎宮字木葉山131-7
原 因	個人住宅新築
調査主体	明和町斎宮跡保存対策室
調査担当	三重県斎宮跡調査事務所
調査期間	昭和59年12月19日～昭和60年1月8日

調査面積 363m²

1) はじめに

指定地の南端部分で、斎宮駅の南々西 300 m の箇所である。これまで、すぐ北方で第37-8 次調査、第43-4 次調査を実施している。その際には平安時代前期の掘立柱建物、溝、土塁および中期の溝などが検出されている。調査は東西21m ×南北17m の調査区を設定して実施した。

2) 調査概要

調査箇所は標高12.2m ~ 12.3m のほぼ平坦な畠である。調査区の北側部分では僅か20cm足らずで地山となり、南側では耕作土下に黒褐色の遺物包含層があり、地山まで40cmとやや深い。検出した遺構には、掘立柱建物 S B 3838・S B 3839、竪穴住居 S B 3847をはじめ、溝、土塁などがある。S B 3838は3間×2間の東西棟、S B 3839は(4)×2間の南北棟であり、南側柱をほぼ揃える。柱穴は、S B 3839は50cm ~ 80cm の方形であるが、S B 3838は径40cm足らずの円形である。柱穴からはあまり遺物の出土はないが、S B 3838の東南隅の柱穴からは土師器甕が1個体直立した状態で出土している。一方、竪穴住居 S B 3847は一辺5mの隅丸方形で、深さ12cm、東半部は一段深くなっている。住居内からは100片足らずの奈良時代の土師器が出土している。柱穴は明瞭でない。土塁は径2m ~ 3m の梢円形を呈するもので、深さ30cm ~ 40cm。遺物の出土は少ないが、S K 3849からは奈良時代の土師器が出土している。S D 3845は現在の道路にほぼ並行し、建物の方向ともあう。幅1.2m、深さ40cm。底が平坦な逆台形を呈する。黒褐色土が埋まり、平安時代前期と鎌倉時代の土器が混在している。東西に走るS D 3841、S D 3850は幅60cm、深さ10cm ~ 20cm の浅い溝で、奈良時代に属する。

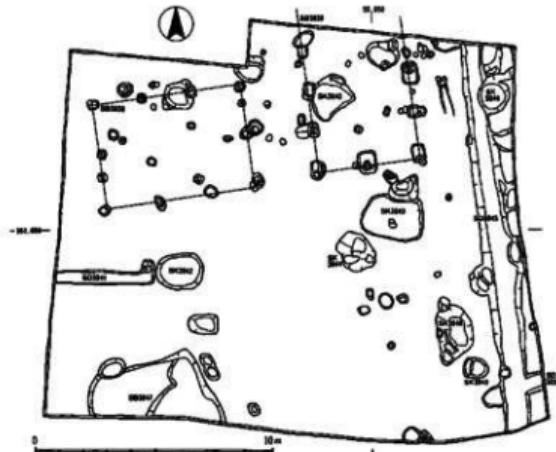


fig. 19 遺構実測図 (1 : 200)

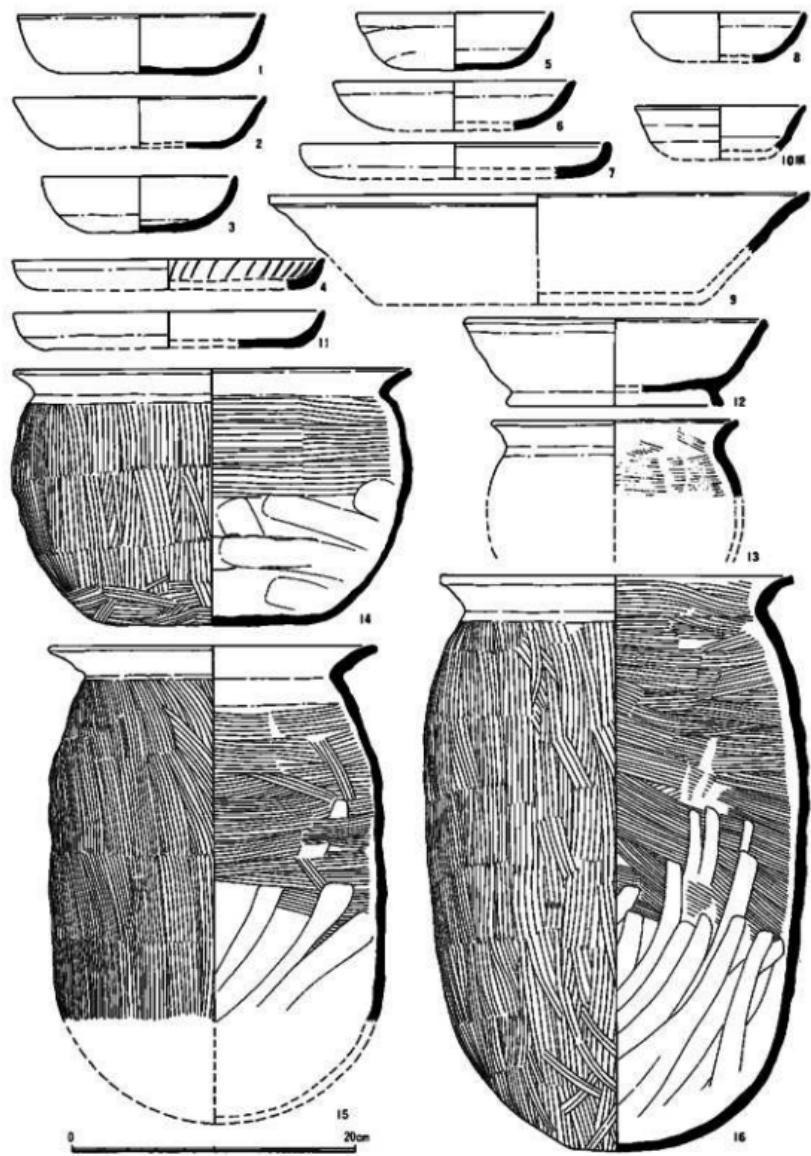


fig. 20 遺物実測図 (1 : 4)

S B3847; 1~4、S K3846; 5~7、S K3843; 8~10、S K3848; 11~15、S B3838; 16

小規模な調査であったが、奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物を検出し、確實に遺構・遺物が牛糞集落南部にも及んでいることが裏付けられた。第53-9次調査においてみつかった円形周溝などとともに、宮城の南部にひろがるこれらの奈良時代の遺構の性格をどう考えるか問題がある。また、斎宮跡の南を限る遺構については今回も明確にし得なかった。

13. 第53-12次調査(6ABL-K)

調査場所 明和町竹川字中垣内464-2

原 因 既設納屋の曳家

調査主体 明和町斎宮跡保存対策室

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和60年1月26日～1月28日

調査面積 70m²

1)はじめに

調査地は宮城西寄りの台地縁辺部で、竹川集落南部の旧参宮街道に面した北側の畠地である。当調査区の東方約100mのところで第48-3次調査が実施されており、数条の室町時代の溝の他、弥生時代中期の溝が1条検出されているが、明らかに斎宮跡にかかわる時期の遺構はない。

幅約4mのL字形の調査区を設定し、調査を実施した。

2) 調査概要

今回検出した遺構は室町時代のものばかりであった。調査区南半部の小穴は、その規模およ

び配置等から考えて建物の柱擺形とは考えられない。確認された遺構は土塙と溝のみである。

南東隅で検出された土塙SK3857は、調査区外へ及ぶため規模は明確にしえないが、方形を呈するもので、深さは約20cmである。遺物は弥生土器2点を含む土師器杯の細片が少量出土したにすぎない。溝は東西溝が3条、南北溝が2条検出されている。SD3854は幅1.2m、深さ30cm、SD3855は幅約1.5m、深さ50cmで、埋土の切り合いよりSD3855の方が新しい。SD3855

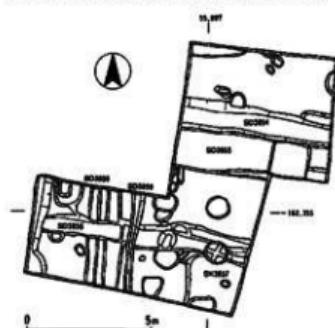


fig. 21 遺構実測図 (1:200)

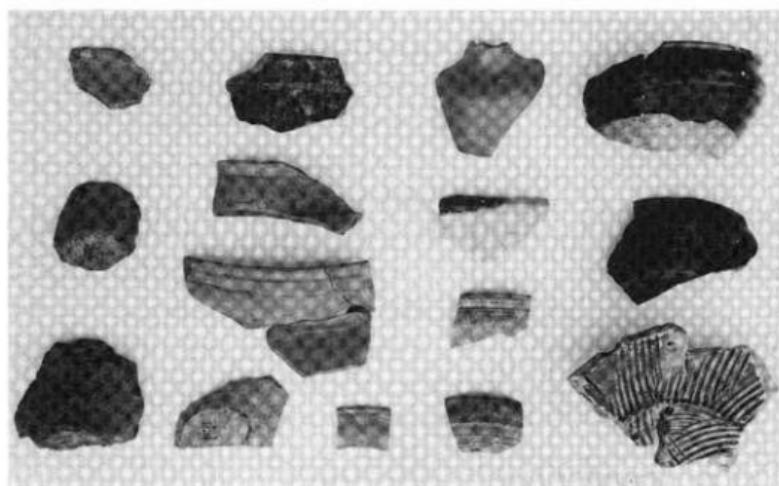


fig. 22 出土遺物写真 (約1:3)

からは土師器の羽釜・鍋・杯、山茶椀、天目茶椀、陶器椀、すり鉢などさまざまなものが出土している。S D 3856は幅約60cmで深さは12cm~18cmと西へいくほど深くなっている。S D 3858とS D 3859はそれぞれ幅30cmと12cmで、深さはともに10cm~20cmと北へいくほど深い。いずれも小規模なものである。

今回も斎宮寮にかかわる時期の遺構は検出されなかった。

14. 第53-13次調査(6ADQ-L)

調査場所	明和町斎宮字牛葉3022
原 因	個人住宅新築
調査主体	明和町斎宮跡保存対策室
調査担当	三重県斎宮跡調査事務所
調査期間	昭和60年2月4日~2月12日
調査面積	103m ²

1)はじめに

斎宮駅前の字牛山に隣接する南側の牛葉の畑地である。これまで付近では、第12-4次(2

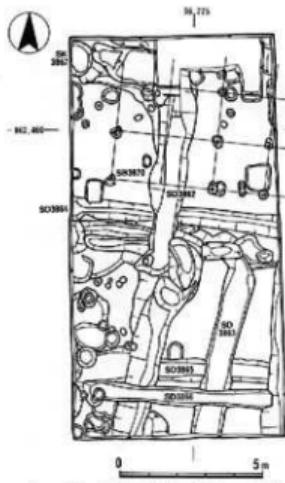


fig. 23 遺構実測図 (1 : 200)

D レンチ) 調査、第37-11次調査、第43-8次調査と小規模な調査がくり返されている。比較的大型の柱掘形をもつ平安時代前期の掘立柱建物も検出されてはいるが、遺構・遺物の多くは鎌倉時代～室町時代のものである。

東西 7.3 m × 南北 14 m の調査区を設定して実施した。

2) 調査概要

調査の結果、溝、土塙など多数の遺構がみつかったが、すべて中・近世のものであり、出土遺物も土師器鍋・小皿、近世の陶磁器類が多い。SD 3862・SD 3863は南北溝、SD 3864・SD 3865・SD 3866は東西溝で、SD 3862を除きいずれも小規模なものである。SB 3870は、中・近世の溝に切られたり、調査区外へ延びて全体の規模は不明であるが、すべての柱掘形内に扁平な石を入れる総柱建物と考えられる。柱間は桁行 1.8 m、梁行 1.7 m を測り、時期は鎌倉時代前期と思われる。近鉄線以南でのこうした建物の検出例は今回が初めてである。SK 3867は楕円形を呈するもので、西肩部分がわずかに調査区外へ出る。平安時代のものと思われる須恵器廢片が少量出土した。このほか調査区北端では、南側の 2ヶ所に階段状の入口をもつ防空濠の跡（東西 3.8 m）もみつかっている。

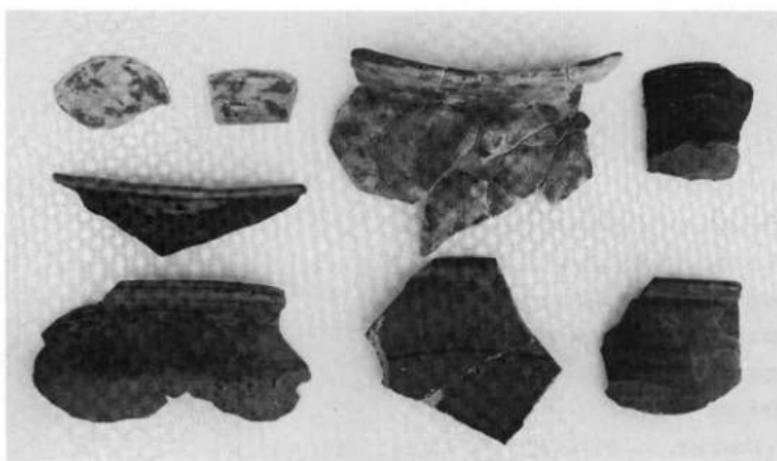


fig. 24 出土遺物写真 (約 1 : 3)

15. 第53-14次調査(6 ACM-O)

調査場所 明和町竹川字東裏287-3
 原因 小学校体育庫移築
 調査主体 明和町教育委員会
 調査指導 三重県斎宮跡調査事務所
 調査期間 昭和60年2月22日～3月5日
 調査面積 45m²

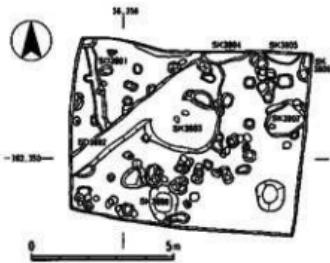


fig. 25 遺構実測図(1:200)

1)はじめに

斎宮小学校関連施設建設に伴う事前発掘調査である。新設する体育馆の使用に際し、講堂の西側に建っていた体育道具保管小屋を移転させることになり、学校の北西隅部分、近鉄線のすぐ脇を東西8m×南北6.2mの小範囲の調査区を設定し、実施した。

2)調査概要

竪穴住居や掘立柱建物は検出されなかったが、奈良時代の土塙 S K3804・S K3807・S K3808、溝 S D3802、平安時代の土塙 S K3803・S K3805・S K3806、溝 S D3801等を検出した。S K3804は調査区北端にあり、未調査区に広がるため全容は不明である。S K3807は1.6m×1.1m、深さ20cmで、S K3808は1.2m×1.0m、深さ15cmとともに楕円形の土塙である。S D3802は幅75cm、深さ19cmで浅く、北に対して東に50°偏って走るもので、S K3803・S K3804に削平され

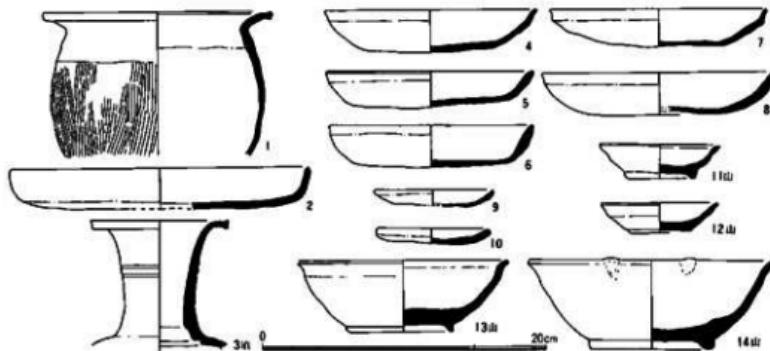


fig. 26 遺物実測図(1:4) S D3802; 1~3, S K3803; 4~14

ているが、土師器甕・皿、須恵器長頸壺、布目瓦などが出土し奈良時代中期に比定される。S D 3801は幅40cm、深さ8cmの北へ延びるもので、南はS D 3802と重複する。S K 3803は2.4m×1.8m、深さ26cmの東西に長い楕円形で中央に30cm程の石があり、埋土にも挙大の石が多く混っていた。ここから平安時代末期の土器がまとまって出土している。S K 3803出土の山茶椀・山皿は藤澤編年の皿段階第5型式に相当するものと思われ、また土師器皿は、形態や調整法において斎宮跡出土土器編年のS D 3052出土皿とS X 2990出土皿との中間的なタイプである。従ってS K 3803出土土器を12世紀末の一群ととらえておきたい。

16. 第53-15次調査(6 AFK-C.D)

調査場所 明和町斎宮字西加座2721-1

原 因 盛土

調査主体 明和町斎宮跡保存対策室

調査担当 三重県斎宮跡調査事務所

調査期間 昭和60年2月27日～3月20日

調査面積 204m²

1)はじめに

字西加座の南側部分で、第34次調査の西隣である。第34次調査では一辺1m前後の大型柱掘形をもつ掘立柱建物を含む計26棟の掘立柱建物をはじめ、槽・土塙・溝など平安時代前期～末期に至る各時期の遺構や多量の縁輪陶器・墨書き土器等が検出されており、当調査区近辺は平安時代における斎宮の中でも主要な一画を占める場所であろうと考えられてきた。

申請面積が400m²に近いため、本年度はまず東側の半分を調査し、残りの半分は来年度に調査することにした。

2)調査概要

調査地の基本的な層序は、耕土、黄茶褐色土、黒色土となっており、掘立柱建物の柱掘形の一部は黒色土上面で確認できるものもあったが、湧水が激しく、水中ポンプを使用しながらの調査であったため、黄白色粘質土の地山まですべて掘り下げ遺構を検出した。その結果、第34次調査で検出している掘立柱建物5棟を含め整然と配置された平安時代の掘立柱建物を10棟確認した。初期の建物はS B 1865、前Ⅰ期の建物はS B 1440・S B 3871・S B 3872・S B 3873、前Ⅱ期の建物はS B 1441・S B 1442・S B 1446で、その他S B 3874は後Ⅱ期、S B 3875は末期のものである。

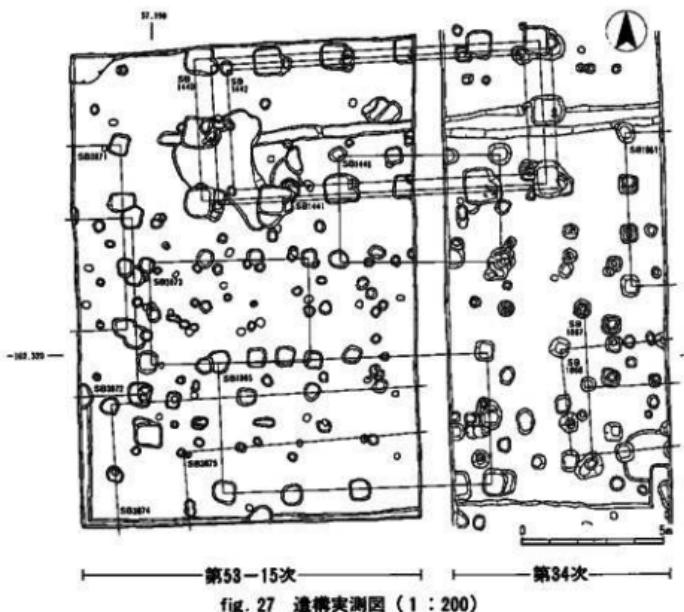


fig. 27 造構実測図 (1 : 200)

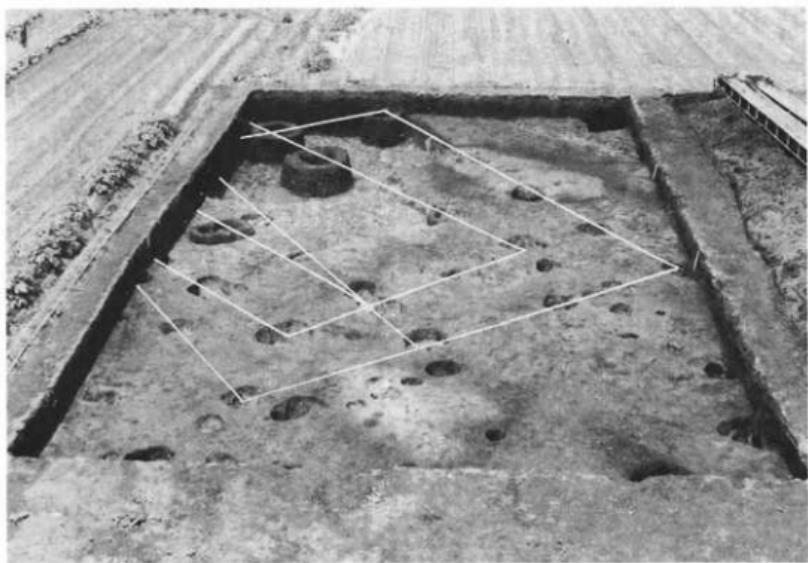
S B 1865はE 2°Nを示す、5間×2間の建物で桁行9.5m、梁行4.6mである。また、調査区北側にあるS B 1440・S B 1441・S B 1442はいずれもE 3°Nを示し、中町地区における区画溝の方向によく描う建物である。なかでもS B 1440は一辺1m程の方形を呈する大型の柱掘形をもつ5間×2間の建物で、桁行12.2m、梁行5.0mである。この建物は柱掘形の埋土の切り合いからS B 1440→S B 1442→S B 1441の順で建て替えが行われ、主要な殿舎であったことが窺われる。

遺物では調査区南西隅の黒色土包含層から黒鉢90号窯期の古い段階に相当する時期の土師器杯・皿などが多量に出土しており、造構として確認できなかったが、おそらく土塙に廃棄された一群と思われる。このほか奈良時代末期～平安時代初期および平安時代後期の土器もまとまって出土している。

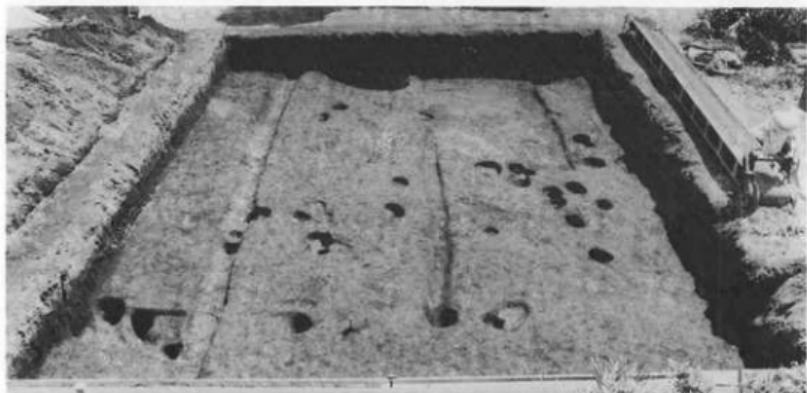
緑釉陶器の出土は、いずれも細片であるが17点出土している。また、黒色土包含層より灰釉陶器碗に「萬」と墨書きされたものが1点出土している。

このように第34次調査の結果とも照合して、中町地区の中でも、大型掘立柱建物が集中する重要な地区であることが再確認された。

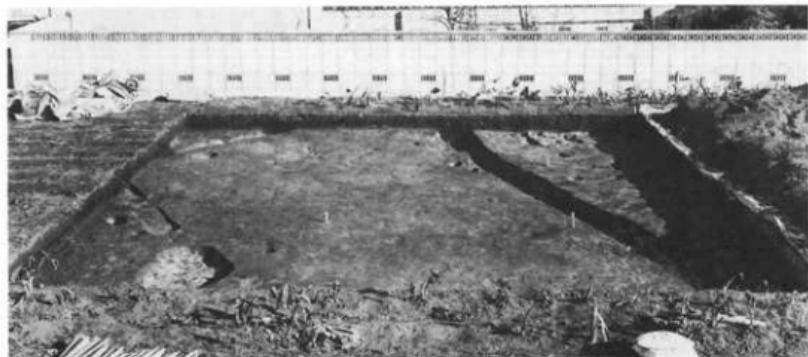
図 版



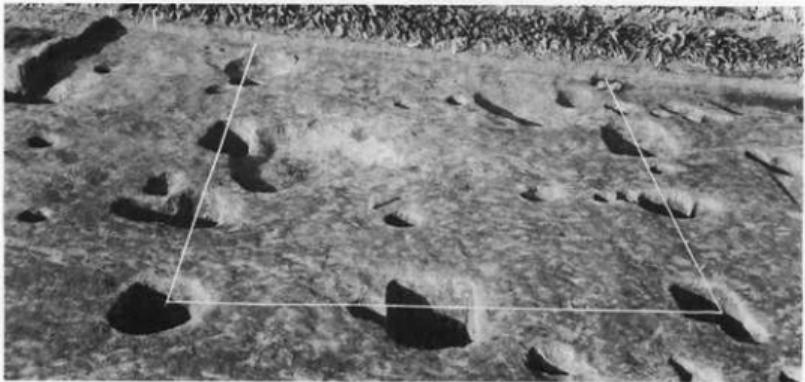
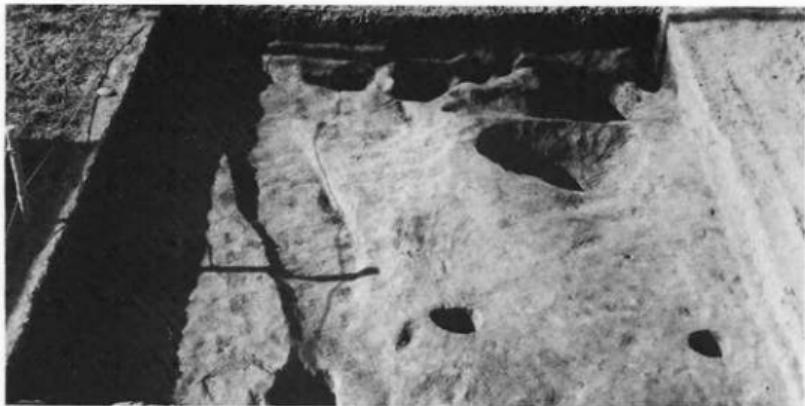
上：第53-1次全景（北から）・下：第53-2次全景（東から）



上: 第53-3次全景(西から)・中: 第53-4次全景(西から)・下左: 第53-5次全景(北から)
下右: 第53-6次全景(南から)



上左; 第53-7次南半部（西から）・上右; 第53-8次全景（西から）・中; 第53-9次西半部（南から）
下; 第53-9次東半部（東から）



上; 第53-10次全景 (東から)・中; 第53-11次全景 (西から)・下; 第53-11次 S B3839 (南から)



上; 第53-12次全景 (北から)・中; 第53-13次全景 (北から)・下; 第53-14次全景 (東から)



上：第53-15次全景（南から）・下：第53-15次SB1440～SB1442・SB3871（西から）

史跡斎宮跡
昭和59年度現状変更緊急発掘調査報告

昭和 60 年 3 月 31 日

編集 三重県斎宮跡調査事務所
明和町
発行 明和町
印刷 光出版印刷株式会社

本書は、明和町及び三重県斎宮跡調査事務所の許可を得て、斎宮研究会（代表服部貞徳）が増刷したものである。

